

ディケンズ・フェロウシップ日本支部  
2016年度 春季大会 (6月18日)

講演「『クリスマス・キャロル』の新訳について」  
井原慶一郎 (鹿児島大学)

1 1858年から、[ディケンズ]は公開朗読を興行としておこなうようになり、レパートリーの数も次第に増えていきましたが、彼が最も得意としたのは、『クリスマス・キャロル』と、最初の長編小説『ピクウィック・ペーパーズ』から取られた一場面でした。このときは、『キャロル』を1時間半、『ピクウィック』を30分かけて読んだそうです。

今日、みなさんの前で、ナレーターの前田村かおりさんに読んでいただくのは、この1時間半の長さに縮約した朗読版の『クリスマス・キャロル』を私が翻訳したものです。

原稿用紙にして約100枚、すべて読むとディケンズが読んだのと同じ1時間半の時間がかかります。今回はこれをさらに縮約して、1時間の『クリスマス・キャロル』に構成してみました。オリジナル版と比べて4分の1ほどの長さですが、世界文学の古典的名作『クリスマス・キャロル』の持つ魅力をみなさんにお伝えできるものと信じています。(井原訳「朗読による『クリスマス・キャロル』」(朗読会の記録)、1-2頁)

2 ディケンズの作品の魅力について語ろうとすると、どうしても原書を声に出して読む、朗読されたテープやCDを聞くといった体験を抜きにして語ることはできません。…

私自身、この公開朗読版『クリスマス・キャロル』を翻訳したいと思った直接的なきっかけは、サイモン・キャロウというイギリスの俳優が同『クリスマス・キャロル』を朗読したテープを聞いたことでした。その朗読のもつ雰囲気そのまま日本語に移し替えてみたいと思ったのです。とくに、未来のクリスマスの情景のなかの静かなクラチット家の場面…から最後の大団円へと向かう12分間が素晴らしく、テープから聞こえてくる満場の拍手にふさわしいパフォーマンスになっています。(井原訳『朗読によるクリスマス・キャロル』、99-100頁)

3 MARLEY was dead: to begin with. There is no doubt whatever about that. The register of his burial was signed by the clergyman, the clerk, the undertaker, and the chief mourner. Scrooge signed it. And Scrooge's name was good upon 'Change, for anything he chose to put his hand to. Old Marley was as dead as a door-nail. (*A Christmas Carol*, STAVE I, Broadview, p.39)

4 いいですか、みなさん、マーレイは死んでいます。もし疑われるのであれば、教会の埋葬記録を調べてみてください。牧師が、書記が、葬儀屋が、喪主が、ちゃんと署名していますよ。スクルージの名前もあります。スクルージの名前は、ロンドンの王立取引所ではたいへん信用があって、彼が署名したものはすべて優良な債権とみなされるんですからね。間違いなく、マーレイは死んでいます。(井原訳『朗読によるクリスマス・キャロル』、7頁)

5 井原訳『クリスマス・キャロル』、帯

◎ 炉端での幽霊話を念頭においた読みやすい訳

◎ 時代背景がよくわかる詳しい注釈

◎ 作品の理解を深める訳者解説

◎ ディケンズ公認のアメリカ版挿絵(ソロモン・アイティンジ) 25点を本邦初収録



図1 ソロモン・アイティンジによる挿絵  
(井原訳『クリスマス・キャロル』、113頁)

- 6 もう精霊(スピリット)たちとつきあうことはなく、その後はずっと絶対禁酒主義(スピリットには幽霊の意味と酒の意味がある)を通した。(中川訳『クリスマス・キャロル』、175頁)
- 7 He had no further intercourse with Spirits, but lived upon the Total Abstinence Principle, ever afterwards [...](A Christmas Carol, STAVE V, Broadview, p.125)
- 8 「さっそく今日の午後、スモーキング・ビショップでも飲みながら、そういった事柄について協議しようじゃないか、ボブ！」(井原訳『クリスマス・キャロル』、203頁)
- 9 In the final paragraph the narrator offers us a splendid example of Wit in the service of Humour related to basic human pleasures [...] Scrooge 'had no further intercourse with Spirits, but lived upon the Total Abstinence Principle, ever afterwards'. Coming so soon after the 'Christmas bowl of smoking bishop', this sublime pun stands the whole idea of Teetotalism on its head by appropriating its special language to express its very opposite. Instead of attacking his old enemy with 'witty' satire Dickens humorously converts it into a subject of innocent merriment. (Slater, p.191)
- 10 [訳注]59 原文では、「それからのちスクルージが精霊たちのお世話になることはなく、絶対禁酒主義に則って暮らしました」(…)。精霊たち(スピリッツ)との関係を絶ったのを、スピリッツ(蒸留酒)などのアルコール飲料を完全に絶つ「絶対禁酒主義」にかけたしゃれ。スクルージは断酒したわけではなく、むしろおどけてその逆のことを意味している。ディケンズ自身は、絶対禁酒主義に反対の立場だった。(井原訳『クリスマス・キャロル』、212-3頁)

	英語	井原訳	注釈	村岡訳 (改訂版)	池訳	脇訳
1	porter	ポーター	焦がした麦芽を使った黒ビール。ロンドンのポーター（荷役運搬人）が好んで飲んだのが名前の由来とされる。栄養補給効果もあった。	黒ビール	黒ビール	ビール
2	negus	ニーガス酒	ワインに湯、砂糖、ナツメグ、レモンを加えた飲み物。最初にそれを作ったイギリスの陸軍大佐（1732年没）の名より。	ニーガス酒 (訳注 砂糖と香料を加えたぶどう酒)	ニーガス酒	レモンを入れたお湯割りのワイン
3	grog	グログ	水割りのラム酒。もと海員用語。1740年にラム酒を希釈して飲むことを推奨したイギリス海軍提督エドワード・バーノンにあだ名（「オールド・グログ」）に由来する。	水割りのラム酒	水割りのラム酒	お湯割りのラム酒
4	mulled wine	マルドワイン	砂糖や香辛料などを加えて温めたワイン。	香料入りのホットワイン	ワイン	香料入りのワイン
5	smoking bishop	スモーキング・ビショップ	ポートワインにオレンジ、チョウジなどを入れた温かい飲料。ピショップ（主教）が着る法衣の色（紫）が名前の由来。	香料入りのホットワイン	赤ワインを温めて…	香料入りの熱い赤ワイン

図2 『クリスマス・キャロル』に登場するアルコール飲料一覧

11 幾度も邦訳されている名作だけに、これまた斬新な趣向が凝らされている。なんと「炉端で語られる幽霊話」としての本来の味わい（訳者による詳細な解説によると、ディケンズ自身が「炉端で読み、炉棚に飾るのにふさわしい」小ぶりで美しい装丁の本にしたのだという）を醸し出すべく、「ですます調」を採用したというのだ。「いいですか、みなさん、マーレイは死んでいます」という、聴衆を前に語りかけるような語勢の冒頭の一文からして、訳者の姿勢は歴然だろう。（東、229頁）

12 The chuckle with which he said this, and the chuckle with which he paid for the Turkey, and the chuckle with which he paid for the cab, and the chuckle with which he recompensed the boy, were only to be exceeded by the chuckle with which he sat down breathless in his chair again, and chuckled till he cried. (*A Christmas Carol*, STAVE V, Broadview, p.120)

13 スクルージは、くすくす笑いながらそう言い、くすくす笑いながら七面鳥の料金を払い、くすくす笑いながら辻馬車の料金を渡し、くすくす笑いながら少年にお駄賃を渡しました。これに勝るくすくす笑いといえば、息も切れ切れに再び椅子に腰を下ろし、ついには感極まって泣いてしまったくすくす笑いをおいてほかにありませんでした。（井原訳『クリスマス・キャロル』、197頁）

14 スクルージは愉快げに、くっく、と喉を鳴らして笑いながら、シチメンチョウの代金を払い、馬車賃を払い、少年に約束の駄賃を渡したが、なおもこみ上げる笑いを堪(こら)えかね、ついには椅子にへたり込んで、笑って笑って泣きだした。（池訳『クリスマス・キャロル』、160頁）

15 「…じつは推敲の最中にけっこうはじめて理解したりするんですよね。こういう意味だったのかというのが訳していてわかることがあります。」（三浦、「第8章 柴田元幸、翻訳を語る」、220頁）

16 「…そう、それ！ そのシャツは穴の開くほどよく見ておくれよ。と言っても、シャツには穴一つ開いてないし、擦り切れたところもないからね。それは野郎が持ってた一番上等なやつで、とってもいいものなんだからね。あたしがいなけりゃ、もったいないところだったよ」「もったいないとは何だい？」ジョーが尋ねました。

「死体に着せて土に埋めてしまうところだったってことさ」女が笑いながら答えました。「どっかの誰かがそんなばかなことをしようとしたんだが、あたしがひんむいてやったのさ。埋めるにはキャラコが一番だよ。死体にはキャラコがよく似合う、ってね。どの道、生きてたとき以上に醜くなることはあるまいよ」（井原訳『クリスマス・キャロル』、167-8頁）

17 “Ha, Ha!” laughed the same woman [...] “This is the end of it, you see! He frightened every one away from him when he was alive, to profit us when he was dead! Ha, ha, ha!” (A Christmas Carol, STAVE IV, Broadview, p.109)

18 …同じ女が笑って言いました。「ひっ、ひっ、ひ。これで万事終わりさ！ 生前みんなを怖がらせて遠ざけておいてくれたのは、死んでからあたしたちをひと儲けさせてくれるためだったというわけだね！ ひっ、ひっ、ひ」（井原訳『クリスマス・キャロル』、168-9頁）

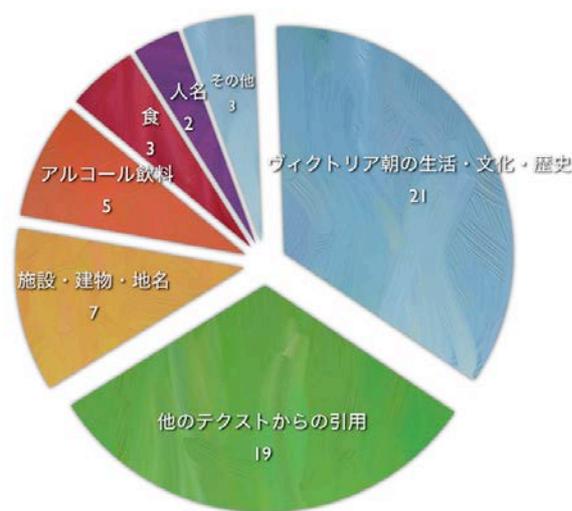


図3 注の種類（井原訳『クリスマス・キャロル』）

19 「訳者解説」の構成

### 1 子どもを救え！

執筆の背景、CCに登場する子どもの3タイプ、「空想する力」

### 2 クリスマスの本当の祝い方

イギリスのクリスマス（伝統的なクリスマスとヴィクトリア朝の都会のクリスマス）

### 3 『クリスマス・キャロル』の技法(アート)

炉端での幽霊話、視覚文化との関わり、朗読によるCC

### 4 心霊主義（スピリチュアリズム）

ディケンズと反・心霊主義、死後の世界（ヒアアフター）

20 エティエンヌ=ガスパール・ロベールによって考案されたファンタスマゴリアは、18世紀の終わりにパリでデビューし、19世紀の初めにロンドンに上陸した。見えないものを出現させるフ

ァンタスマゴリアは、幽霊や超常現象との相性が抜群によかった。あるいは、幻影というより没入という意味では、都市空間のなかに別の場所と時間を出現させる装置——360度の円筒形の絵画——パノラマを想像したほうがよいかもしれない。1793年に開館したレスター・スクエアのパノラマ館では、上下二層の巨大な内壁に大小二つのパノラマが描かれていた。パノラマの鑑賞者は、暗い観覧台の中心に身を置き、外光で照らし出された明るい景色を眺めた。（「訳者解説」、井原訳『クリスマス・キャロル』、242頁）

21 オリヴァー・グラウは、最近の研究『ヴァーチャル・アート——幻影から没入へ』…において、美術史の分析を広げ、「外部の視覚的印象から観察者を隔離する」ことを目的とした空間と体験について考察している。グラウは没入型の「イリュージョンの空間」の歴史——パノラマ、シネオラマ、ステレオスコープ、センソラマ、アイマックス3D——を紐解くことによって、イメージ空間の全体性…を提供する視覚システムについて説明している。…フレームに収められたイメージは、まったく異なる方法で知覚と認知を組織化し、構造化する。…「ヴァーチャル」が没入型「リアリティ」との反射的な連想から切り離されれば、私たちは、フレームに収められたさまざまな「ヴァーチャル」映像——絵画、写真、カメラ・オブスクーラによって生み出される映像、幻灯機によって投影された映像、それに続く映画とテレビの動画メディア——についても説明することができるのである。（フリードバーグ『ヴァーチャル・ウィンドウ』、17頁）



図4 “The Vision of Ali Baba”（ソロモン・アイティンジ画）  
（井原訳『クリスマス・キャロル』、53頁）

22 幽霊の舞台化にあずかって力あった当時の幻燈興行等のことは、視覚文化論の名作、アン・フリードバーグ作『ウィンドウ・ショッピング』（松柏社）の訳者たる井原慶一郎氏のこととて、短い解説中に見事にまとめてみせてくれているが、幽霊興行にしろパノラマ的展望にしろ皆、英国ピクチャレスク文芸の問題、そして近現代視覚文芸論の中核テーマなのであり、ディケンズの社会批判小説の意外な後背地の広さに改めて驚かされる。（高山）

## 引用文献

梅宮創造訳著『「クリスマス・キャロル」前後』大阪教育図書、2013年。

春風社HP。<<http://shumpu.com>>.

高山宏「C・ディケンズ著『クリスマス・キャロル』を読む／まさに今のための本——実は相当なまなましい経済小説、格差指弾の苦い作品」、2016年1月30日付『図書新聞』3240号所収、1頁。

チャールズ・ディケンズ、池央耿訳『クリスマス・キャロル』光文社古典新訳文庫、2006年。

————、井原慶一郎訳・解説『クリスマス・キャロル』春風社、2015年。

————、小池滋訳『クリスマス・キャロル』新書館、1985年（小池滋・松村昌家訳『クリスマス・ブックス』所収、ちくま文庫、1991年）。

————、佐々木徹訳『大いなる遺産』河出文庫、全2巻、2011年。

————、中川敏訳『クリスマス・キャロル』集英社文庫、1991年。

————、村岡花子訳『クリスマス・キャロル（改訂版）』新潮文庫、2011年。

————、脇明子訳『クリスマス・キャロル』岩波少年文庫、2001年。

————（原作）、井原慶一郎訳「朗読による『クリスマス・キャロル』」（朗読会の記録）、鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第62号（2005年）所収、1-34頁。

————（作）、井原慶一郎訳「公開朗読版「クリスマス・キャロル」」、鹿児島大学経済学会『経済学論集』第64号（2005年）所収、49-75頁。

————（作）、井原慶一郎訳『朗読によるクリスマス・キャロル』K&Yカンパニー、2011年。

東雅夫「今日のベスト・ブック〈幻想と怪奇〉」『小説推理』2016年2月号所収、228-9頁。

アン・フリードバーグ、井原慶一郎・宗洋・小林朋子訳『ウィンドウ・ショッピング／映画とポストモダン』松柏社、2008年。

————、井原慶一郎・宗洋訳『ヴァーチャル・ウィンドウ／アルベルティからマイクロソフトまで』産業図書、2012年。

三浦雅士『村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ』新書館、2003年。

村上春樹、スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー（村上春樹 翻訳ライブラリー）』「訳者あとがき」、中央公論新社、2006年。

村上春樹・柴田元幸『翻訳夜話』文春新書、2000年。

Simon Callow, *An Audience with Charles Dickens* (London: Hodder Headline Audiobooks, 2003). 3 CDs.

Charles Dickens, *The Annotated Christmas Carol*, ed. Michael Patrick Hearn (New York: W. W. Norton, 2004).

————, *A Christmas Carol*, ed. Richard Kelly (Peterborough, Ontario: Broadview Press, 2003).

Oliver Grau, *Virtual Art: From Illusion to Immersion* (Cambridge, MA: MIT Press, 2003).

Keiichiro Ihara, “Dickens and the Gospels—A Christmas Carol—.” 広島大学文学研究科英文学会『PHOENIX』第44号（1995年）所収、13-25頁。

Michael Slater, “The Triumph of Humour: The *Carol* Revisited,” *The Dickensian* 89 (1993), pp.184-92.